

ベストペーパー賞・ベストペーパー特別賞・若手学生奨励賞 選定記

神沼靖子（第14回情報システム学会・研究発表大会 BP賞選定委員長）

2018年12月1日（土）に第14回情報システム学会の研究発表大会が開催され、ベストペーパー賞・ベストペーパー特別賞・若手学生奨励賞の3賞が選定された。

【おめでとう！ 受賞者の皆様】

- ・ ベストペーパー賞
金田重郎（同志社大学大学院）：ハッセ図としてのクラス図・ER図について
- ・ ベストペーパー特別賞
安藤慧（慶應義塾大学院）：建造物内の避難経路立案のための最適化手法
- ・ 若手学生奨励賞
秋本桃子（文教大学大学院）：英語対話練習ロボットサービスにおける教師の業務ルール記述と行動認識の検討

【各賞選定のプロセス】

今大会での選定プロセスを簡単に紹介しておこう。海老根実行委員長から、昨年度のBP賞選定委員に今年も引き続きお願いできないかとの問い合わせがあり、全員が協力することになった。この時点（7月6日）から、BP賞の選定活動が始まった。

手順1：選定委員は、期限までに投稿された論文をダウンロードして内容を確認する。

手順2：各論文について、大会当日に発表を“是非聴きたい／できれば聴きたい／聴かなくてもよい”との希望をとり、希望者の多いセッションの重複が少なくなるようにプログラムの調整を行う。

手順3：各委員は発表会場を自由に回って、論文内容と発表内容とを総合評価し、さらに各賞の発表番号と選定理由を付した投票用紙（無記名）を提出する。

手順4：選定委員会で投票結果を集計し、委員全員が思いを共有して、各賞の該当者を決定する。

以上の手順で選ばれたのが上記の各賞である。

【各賞の特徴と注目される観点】

ベストペーパー賞では、情報システム論文としての内容、アイデアの新規性、完成度、情報社会における有用性などが総合的に判断される。

金田重郎さんの発表は、「論理の展開が明快で、クラス図作成方法が分かりやすく展開されていること」、「情報システム構築の思考プロセスに従って自動的にDB設計が行われ、生成される方法の不変化が期待できること」、「情報の構造を簡略に表現することで、利用者による情報の利活用を実現したこと」、「基本的な開発方法論を地道に且つ一貫的に

実践した研究であること」などが評価された。また「教育現場で悩んでいることを解決する手法の一つとしても有用である」、「構築側のコラボに道が開ける可能性もある」などといった今後に向けて期待している声もあった。

ベストペーパー特別賞では、もう少し広い視野で論文内容と発表内容が総合的に判断される。

安藤慧さんの論文は、「避難経路について、建物内の状況のシミュレーションを実施し、手法を改善したのがよかった」、「従来の研究との差異がはっきりしており、分かりやすい発表であった」、「発表スライドの作成が優れていた」などが評価された。また、「フィールドにおける評価検証など今後の課題は残されているものの、意思決定プロセスの精度向上と大幅な効率化が認められる面白い試みであること」、「研究とビジネスを結びつけることが期待できること」、「人間の意思決定支援への実用化が期待できること」なども評価された。

若手学生奨励賞は、これからの情報システム学会を担う若手研究者の増加を期待して設けられた賞であり、若手学生の該当者として4つの条件が付されている。それらは、研究発表会当日において、「①大学に在籍中の大学生または大学院生であること（ただし、社会人の学生は除く）、②30歳未満であること、③論文の第一著者で且つ発表者であること、④提出期限までに論文を投稿していること」の全てが満たされていることである。

秋元桃子さんの発表は、「研究のデザインが整っていること」、「今回の研究発表の位置付けが分かりやすいこと」、「研究の成果としても有用であること」、「研究の完成度が高く、実装による実験もなされていること」、「AIの機能を活用した教師の能力の拡大が検討されていること」などが評価された。

【BP賞制度の設立経緯と学会の更なる発展に向けて】

10周年記念論文賞（2016年）で優秀論文が表彰され、翌2017年に伊藤会長や事務局長と情報交換をする中で若手学生を奨励する案が生まれた。こうしてベストペーパー賞、ベストペーパー特別賞、若手学生奨励賞の3点セットがBP賞と名付けられて、今年に継承されたのである。

選定委員（全6名）の活動は試行錯誤を重ねながらも、BP賞のルールを敷くことができた。そして今後の研究発表会における参加者のモチベーションを高め、次世代を支える若手へのバトンタッチや学会活性化への兆しを感じることができた。さらに、今回新設されたポスターセッションによって学生参加者が増大した。このイベントが今後の情報システム研究の質の向上につながるであろうことは容易に想像できる。選定委員は全ての論文を読み、手分けして全ての発表会場を回って情報を交換し共有している。そして、受賞論文以外の発表にも興味深い話題がたくさんあったと感じている。

発表された論文の芽が更に大きく成長することを期待して、「内容をもう一度見直され、論文誌に投稿されること」をお待ちしております。